
銀河の夜

新品の靴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河の夜

【コード】

N0980S

【作者名】

新品の靴

【あらすじ】

かなしいおはなしです。

「お父さんは、どこへいったの？」

「遠くに行っただけよ。」

「なのはどうして、お父さんは・・・」

「さあ、もう行く時間よ。」

「いくつてどこに？」

「遠い所よ。」

「お父さんと同じところ？」

「いいえ、違う遠いところよ。」

「もう、お父さんと会えないの？」

「ええ、もう会えないわ。」

「でも、でも、」

「いい？この扉を開けたら一目散に走って駅へ向かうのよ。誰かいても、誰が話しかけてきても、聞いちゃだめ。まっすぐ駅を目指して走るの。」

「うん・・・。わかった。」

扉がコマ送りで開いていく。

繋いだ手を放さないようにあたしは駅へ向けて走った。

途中で誰かいたかもしれないし誰もいなかったかもしれない。

誰かが声をかけてきてたのかもしれないしかけてきていなかったのかもしれない

なにも分からなかった。

とにかく、あたしは、お母さんを引っ張って、まっしぐらに駅まで走って行った。

星が瞬いていた

あたしが小さかった頃、お父さんにどうしてお星様がチカチカして
るのか聞いたことがあった。

「お星様たちはね、ああやって他のともだちと交信しているんだよ。」

「……あのときは、銀河ぜんたいがやさしかった

だけであたしの左手を握るお父さんはもういない。

きれいで冷たい夜空があたし達を見下ろしていた。

寒くって、悲しくって、泣きだしそうになって、ひつくってなつたけれど、お母さんもひつくってなりそうだったから、声を上げて泣かなかつた。ただ涙の通つた跡が冷たかつたから、左手でぬぐつた。

「お父さんの所へ、行きたい？」

お母さんの瞳は澄んでいた。

「うん。あたし、お父さんの所へいきたい。お母さんは？」

「うん。私も、行きたい。」

優しい顔でお母さんは私を下ろしてくれた。

見慣れない目線に立って、まるで自分が列車そのものになったようだった。

ごつごつとした石を踏みながら線路を歩く。

不思議と寒くはなかつた。

違和感と悲しみだけが溶けだしていた。

遠くの方に、白い点の光が見えだした。

それはどんなお星様よりも眩しかった。

「またむかしに戻りたいね。」

お母さんはそう言ってあたしをぎゅっと抱きしめた。

ぎゅっと、ぎゅっと、した。

点だった光はだんだんと大きくなっていった。

風があたし達に向かってわああつと吹きつけてきた。

あたしとお母さんは、背筋をピンと伸ばして、顎を引いて、それに向き合つた。

警笛が寒い夜空に響く。

あたしも、お母さんも、涙の跡はもう乾いていた。

お母さんの左手は白くとても冷たかった。

強く手を握り返して、あたしはお母さんを見た。

風で黒くて綺麗な髪の毛が波打ち、瞳は光に照らされて輝いていた。

轟音と警笛がすぐそばで聞こえた。

あたし、お父さんとお母さんのごともで、ほんとうによかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0980s/>

銀河の夜

2011年10月7日09時07分発行